
姉妹

冬瀬志保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉妹

【Zマーク】

Z5968Z

【作者名】

冬瀬志保

【あらすじ】

十一月二十日。

真選組副長補佐、土方葵の誕生日。

彼女の誕生日の招待客は……。

梨栖先生とのコラボです。ご了承は頂いております。

(前書き)

「ふえっくしょんー！」

12月10日の真選組屯所。

大きくなくしゃみが、部屋中に響く。

廊下の向こう側で、隊員たちが何かを祝つていいのだりつ、ぎやあぎやあとやかましい声をたててているのが聞こえる。それが余計、頭痛を煽り、くしゃみの主は布団をかぶつた。

「向の邊のべがよもつ……。」

その日の朝、將軍のお膝下の街で、小さな窃盗事件が起きた。狙われたのは、万事屋という名の、いわゆる何でも屋である。決して大きな店ではなかつたが、オーナーの人徳なのか、その店は不思議と人通が多い。

妙な事件だつた。クリスマスまであと少しと浮かれていた万事屋従業員の酢昆布が、盗まれたというのだ。

たいして騒ぐようなことではなかつたが、その従業員にしては憤慨する対象だつたのだろう、すぐさま110番した。

だが、来るはずの警察が来ない。

その理由を説明するには、昨晩まで時をさかのぼらなければならぬ。

いつもは騒がしい真選組屯所も、降つてゐる雪のおかげか、いつになく静寂に支配されている。

冬至も間近に迫り、寒さも絶頂に達してゐた。歩いている廊下が冷たい外気を吸い込んでゐるせいで、素足で歩く度に悲鳴を上げたくなる。

そんな屯所の局長室には、四人の人間が集まつてゐた。全員、黒地に金の縁を施した制服を身に着け、静かに座している。

「明日、紹介したい奴がいてな。」

沈黙を破つたのは、上座にどつかりと座つてゐる、大柄の男　　真選組局長、近藤勲であつた。

その言葉が向けられた相手は、逆に小柄な少女。どちらかと言えば美少女の範疇に入つてゐたが、鋭い眼光を帶びてゐる瞳孔が開いた瞳は、見る者を圧倒させる。

彼女が真選組副長補佐、土方葵である。

「紹介したい人……ですか。」

近藤の言い草が、まるで古くからの知り合いを自分に引き合わせるような感じがしたから、葵は少しばかり小首をかしげた。

古くから、と言えば、武州の頃くらいしか思いつかない。かと言つて、その時の近藤の知り合いを、自分が知らないはずもない。はてさて誰なのだろうと考へ込んだりすると、隣に座つていた兄、十四郎が、嫌そうなのか嬉しそうなのか、言葉では表現できない表情をしているのに気がつき、葵はさらに首をひねつた。

「ねえ、トッシー。トッシーが知つてる人なの？」

尋ねると、兄があまりに敏感に反応するから、驚いた。

「いや、まあ、知つてるけど……。」

顔をそむける土方と、それを訝しがる葵を見比べてから、残りの一人、沖田が、二マリと唇の端を釣り上げる。

「知つてるも何も知り過ぎてるんでしょ、土方さん。大丈夫ですよ。照れなくても。将来はあつちゃんの義姉になる人なんですか？」

当たり前ながら、その後に、土方の怒りが爆発した。

とにかくにも、その晩、近藤たちは葵に引き合わせる相手を誰とも言わず、さつさと寝室に放り込んだ。

「何で言つてくれないの、つてかそもそも言わないんだつたら紹介する人がいるとか言わないでよ」とグチグチ文句をつけたが、彼らは全く取り合つてくれなかつた。

部屋に押し込められていじけていた葵の目に、ふと、十一月のカレンダーが映る。

そう言えば今日は、十一月の十九日。

となると、明日は……。

子供のころによく覚えた懐かしい感覚に、葵は微笑した。

誕生日と、それから、近藤たちが言つていた「紹介したい奴」。明日はたくさんの楽しみが待つている。

そう心の中で呟き、その口は深い眠りについた。

はしづだつた。

が、実のことを語つと、氣になる奴とやらが誰なのかわからずじまい、男なのか女のか、自分より歳が上か下か、どんな性格なのか、なぜ兄がああいう表情をしていたのか、無限にどうでもいい疑問が頭に浮かび、眠りにつくのを妨げた。

明日になればわかる。

そうやつて瞼を閉じたのは、深夜の三時。

明日という日はすでに今日になつており、当然、彼女が目を覚ましたのは朝の十時を回っていた。

真選組の目覚まし係が起きなかつたことで、その日のスケジュールは思いつきり崩れた。

「しづじつた……。」

葵は一人、ブツブツ言いながら、かぶき町の通りを歩いていた。偶然寝坊したその日が非番だつたので、久しぶりに兄が自分のために買つてくれた紫色の着物を着ている。

いつ「その人」に会わせてくれるのか尋ねてみたら、近藤は思い切りはぐらかして、「夜会わせるから」と笑つたきり、何も答えてくれなかつた。

冷たい木枯らしが、葵の髪をなびかせる。

身体を小さくしながら、葵は暖をとるために近くにあつた書店へと入り、マンガ雑誌の所へ足を向けた。

それから、「週刊少年ジャンプ」というタイトルの雑誌を手にとる。が、誰かの手と自分の手が重なつた。

「あ。」

葵と相手の声がかぶさり、二人の視線が同時に合つた。そして、相手の顔を見た瞬間、葵は目を見開く。

理由は単純明快。その人物が、あまりにも端整な顔立ちの娘だつたからだ。

その娘は、美しい姿をしていた。

まるで相手を吸い込むかのように澄んでいる瞳は、宝石のような緑。栗色の髪は見事なまでの天使の輪を作り、見る者に神々しさを与えるまでに華があった。

そして、そのほつそりとした身体の輪郭を包むのは、真っ白い水仙を模つた、瞳と同じ、緑柱石の色をした着物。歳は、葵より一つ、一つほど上だらう。しかし、あまりにも彼女の纏う雰囲気が大人びていて、自分とさほど歳の差がないとは思えなかつた。

「あ、えと……。」

あまりに整つた顔立ちをした彼女に、葵は気押されるような思いがして、思わず「週刊少年ジャンプ」から手を離した。

「なんじゃ……。いらんのか？」

娘が問い合わせてくる。

しかし、その口調があまりに時代がかつていて、葵はうつかり「ほへ？」と間が抜けた声を漏らした。

が、すぐにいつもの表情に戻つて、礼儀正しく首を振る。

「あ、はい、どうぞ。」

そう言つと、娘は朗らかに微笑んだ。

「そう。ありがとう。」

葵はぺこりと頭を下げて、娘に踵を返し、ふうと息を吐いた。娘のそばにいると、なぜだかわからないが緊張した。

けれど、そんな状態がゆるんだのも一瞬のことだ、

「のう。」

娘に声を掛けられ、再び肩に力が入る。

「はい。……何でしようか。」

ぎこちない動きで振り向くと、「ジャンプ」を大事そうに抱えていた娘が、疑問を抱くような瞳で、じいっとこちらを観察しながら尋ねてきた。

「そなた……。どこぞであつたか？」

今度は、葵が疑問に思つ番だった。

しばらく話しているうちに、一人はだんだんと打ち解けていった。恋歌と名乗る容姿端麗な娘は、最初、葵の名字を聞いて「私の知り合いにもその名字を持つ奴がある。……ようわからん奴じゃ。」などと口ほしていたが、すぐに「葵殿のことではない。」と慌てた。その慌てぶりが何とも言えず、葵は、なんて可愛い人なのだろう、と心中でくすりと笑つた。

かぶき町の大通りを歩きながら、葵が買ったコンビニの「からあげちゃん」を頬張り、恋歌は懐かしむように目を細めた。

「しばらく京におつてのう……。最近、その『土方』と再会を果たしたんじや。」

そう言ってから、十字架を飾つたネックレスを愛おしげに眺めた。と、葵はそのネックレスに見覚えのあつたことを思い出す。そう、どこかで見たはずなのが……。

「……その土方さん、どんな人なんですか？」

訊くと、恋歌は少し嬉しそうな表情をして、すぐに無表情になると、始めた。

「ぶつきらぼうで意地悪で、なんだかよくわからん奴……。」

答えになつてないですよ、と笑つて言つと、恋歌は顔を赤くして黙つてしまつた。

少しの間、沈黙が降臨するが、やがて、唐突に恋歌が切り出した。「ところで葵殿。少し付き合つてもらいたいのだが、良いか?……ちょっと、これから会う人に、贈り物をしたくてな。ちょうど葵殿と同じ年ごろの女子じゃから、趣味も合つじやない。」

その言葉に、葵はにこりと笑つた。

「もちろん。」

そんな葵に、恋歌も顔の赤らみを残しながら、微笑を返した。

「ネックレスか指輪かイヤリングか、はたまたブレスレットか……。」

「悩む。」

大江戸デパート。江戸中、どこを探してもこのデパートほど大きな百貨店は存在しない。

そんな大型商店に、真剣に苦慮する恋歌の咳き。

葵は苦惱するような顔をした恋歌に、そつと声をかける。

「恋歌さん。心がこもっていれば、貰う人はそれだけで嬉しいと思いますけれど。」

「いやしかし！」と恋歌は拳を握り締め、叫ぶ。「奴の妹となると手は抜けん！嫌われたりしたらお終いじゃ！」

「すみません恋歌さん、落ち着いて下さい。人見てます。」

が、注意されても恋歌の勢いは止まらない。

「故に絶対に嫌われてはならん！奴の妹がどんな趣味してるのが調べておけばよかつたあ！」

「だから落ち着いて下さって！心こもっていれば何でもいいんですって！」

「……そういうものか？」

「そういうものです。」

自身に満ちた葵の返答に、恋歌はふむと首肯した。

「そうか……なら、苦慮して選んだものなら、どれでも受けとってくれるのか。」

葵は、それを聞いて微笑む。

「あたしだつたら、喜んで受け取りますけれど。」

その答えに満足したかのように、恋歌は「決めた！」と慌てて一つのペンダントを手にとつた。

それを見て、葵は思わず言葉を漏らす。

「可愛い……。」

恋歌が選んだ、薄い紫の蝶々を模つたその首飾りは、自分と同い年の少女にはよく似合いそうなものだつた。恋歌が人に送るために選んだものなのに、自分が欲しいとまで思つてしまつ。

「そ、そつかのう……。」

恋歌は自分の選択が良いものだったと知り、少し照れたような表情を見せた。

「はいーきつとこれを受け取つたら、喜んでくれますよー。」

葵の言葉を聞き、恋歌は微笑む。

「……買い物をすませようか。」

そう呟いてから、一人はレジへと向かった。

デパートを出ると、もう既に田は傾き始めていた。太陽は地平線に飲み込まれかけていて、完全に姿を消したわけではなかつたが、すでに上空は深海のような濃紺に染まつていた。

「……すまなかつたな、こんな時間まで付き合わせてしまつて。」

「いえ、自分は恋歌さんといれて嬉しかつたです。」

妙齡の女子一人が、河川敷をゆっくり歩きながら言葉を交わす。

「また会えるとよいのだが……。私は京に異動されていてな。今日と明日だけ、上司に知り合いの妹の誕生日だから、といわれて呼び戻されたんじや。近いうちに再会は難しいかもしけん。」

「……そうですね。」

葵は残念そうな顔をするが、やがて、

「でも、きっと会えますよー！本屋で偶然同じ本を手にとつた、つて、なんかよく運命的な出会いの時に使われるじやないですかー！」

明るい声を出してそう言つた。

葵の愉快そうな表情に、恋歌もつられて微笑んだ。

「せうだな。……いや、きっとそれに相違ない。」

しばらく、そうやって二人は河川敷をぼうつとしながら歩いていた。地平線に目をやると、すでに太陽は沈んでいる。残光も、もうない。あたりは、静寂に包まれた。

と、その時。

「葵いー！」「あつちゃんー！」「葵くんー！」

聞きなれた三つの声に、葵は前方に目を凝らした。

そして、「トッキーたちー」と目を見張る。

が、驚いたのは、兄たちの存在だけではなく、隣にいた恋歌までもが、「局長！」と叫んだからだった。

「…………え？」

二人とも顔を見合わせ、瞬きする。

状況が、理解できない。

「あれ？ もしかして二人とも、すでに知り合い？」

葵たちに追い付いた近藤が、間抜けな声を出す。

「いや、知り合いつていうか……。」「今朝、知りあつたんじゃが……。」

葵の言葉を恋歌が継ぐが、その態度は、暗闇の中から土方が現れてから、ぎこちないものになつた。

土方も、予想外の出来事だったのだろう、「げ。」という顔をしながら、顔をそむける。けれど、その顔には嫌悪の表情はなく、逆に照れているようにも見えた。

「えと……。葵殿はもしかして……。」

土方からいつたん目を話した恋歌は、上擦つた声で尋ねる。葵はハツとしたように顔をあげ、ようやく理解できたような顔をした。

「近藤さんが言つてた『あわせたい人』って……。恋歌さん？」それから数分間、何とも言えない沈黙が流れた。

その晩の真選組屯所は、いつになく騒々しかつた。

一つは、真選組の「救いの副長」が誕生日を迎えたこと。

そして、もう一つは、その副長と、「神速の女王」が顔を合わせたことだつた。

「いや……まさか葵殿が義妹……じゃない、土方の妹だつたとは……。」

恋歌が呟くと、今度は葵も独りで言つ。

「トッシーのお嫁さんがねえ……。うん、こんな綺麗なお人形さんのような人だつたとは思いにもよらなかつた……。うん、てつきり

キュー・ピー嫁に貰つかと思つてかい。」

「貰わねーよそんな嫁。つてか今の言葉撤回しや。」

兄の鉄拳が頭を直撃し、葵は苦悶の声を漏らす。

が、なぜだか恋歌は顔を真っ赤にする。

ふと、思い立つたように持つていた鞄の中を探り、葵に一つの包みを差し出した。

「中身はもう知つておらうが……。誕生日、おめでとや。」

包みを受け取ると、葵の表情がだんだんと明るくなつていぐ。急いで兄の拳から逃げ出してから、葵は包みを開けた。

「……ネットレス……」

中から現れた首飾りに田を輝かせ、葵は「いやつたあああ……」と喜びながら屯所の中を喜びのあまり駆けまわる。そして、中庭を百周くらいしおわつたあと、恋歌の前に戻ってきた。

「あの、付けてくれませんか！？」

最初、葵の喜びように呆気にとられていたが、すぐに恋歌は微笑むと、葵の掌におさまつていったネットレスを、彼女の首にかけてやつた。

葵は満面の笑みを浮かべて、恋歌に向つて礼を言ひ。

その一人の姿が、まるで姉妹のようだ。

それ以来、葵と恋歌は、真選組の隊員たちから「あの姉妹」といわれるようになつた。

無論、土方が嫌なのか嬉しいのか、よくわからない表情をこの「田間浮かべたのは、言う間でもない。

そして。万事屋の従業員が翌日、真選組に乗り込んできたのはここだけの話。

（後書き）

今日は冬瀬の「土方葵の真選組日誌」のヒロイン（らしくな）ヒロイン）・葵の誕生日でした。

という訳で、勝手に私が梨栖先生に頼んで書かせてもらい……。

自分で書つのもなんですが、素敵なお話が書けました！！

梨栖先生、本当にありがとうございました！！

「銀魂」出動！！真選組」

<http://ncode.syosetu.com/n2110>

j/

「銀魂」集合！！真選組」

<http://ncode.syosetu.com/n6438m/>

これらが、梨栖先生の須藤恋歌ちゃんの物語です。

「銀魂」美しき蜘蛛の巣にかかりて」

<http://ncode.syosetu.com/n0531q/>

「銀魂」美しき蜘蛛に睨まれて」

<http://ncode.syosetu.com/n6456v/>

これらも梨栖先生の、「つづくも」シリーズであります。

本当に素晴らしいこの歌、この四作、ぜひ！――謹んで――！

そして最後に。

葵、誕生日おめでとう――！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5968z/>

姉妹

2011年12月20日15時50分発行